都市住民の親族ネットワーク

Kin Network of Urban Dwellers

田中 恵
TANAKA Satoshi

This paper aims to clarify the characteristics of the kin network of urban dwellers by analyzing the factors affecting their formation and some aspects of their intimate networks as indices of selectivity and the preferability in kinship. Data analysis from the survey conducted in seven cities on 732 married residents over thirty years-old found that the educational level and urbanity affect the choice of kin as intimate network partner. It was also revealed that the social context for intimate network is relevant to the size of the network. Other aspects include the frequency of direct contact and how much his or her spouse know his or her intimate network partner.

1. はじめに

本稿は、都市住民がとり結ぶ親族ネットワークの関係性を、最も親しい人との関係であるインティメイト・ネットワーク (intimate network) の側面から明らかにすることを目的としている。

都市を独立変数として、その都市に住む人々の社会的性格や社会関係を明らかにしようとする考え方は、すでに、ジンメル の著作の中に見られるものである。ジンメルは、『大都市と心的生活』において、大都市居住者の社会的性格や態度を「小さい町」や「農村」と対置して特徴づけようとした (Simmel 1903)。このような都市を独立変数とする考え方の中で、個人がとり結ぶネットワークへの効果に関しては、これまでも、そして、今日でも、都市社会学の重要な研究テーマの一つになっている。その中で、ウェルマンは、マクロな社会変動が個人の第一次的關係に及ぼす影響に関する議論を、「コミュニティ喪失論」、「コミュニティ存続論」、「コミュニティ解放論」の3つに整理した (Wellman 1979)。「コミュニティ喪失論」は、工業化・官僚制化された都市における親族や近隣の連帯の衰退を主張する見解であり、「コミュニティ存続論」は、そのような都市にあっても、第一次の紐帯は繁栄し続けていると主張する見解である。これらに対して、ウェルマンは、コミュニティの概念を地理的限定から切り離し、都市の第一次の關係は地域社会を越えて、空間的に分散したネットワークとして展開するという「コミュニティ解放論」を主張した。いずれの議論も都市のネットワークへの効果を一定程度、説明するものであり、これらを援用して検証を試みた研究もある⁽¹⁾。

さて、親族關係が都市においても存続していることは、「コミュニティ存続論」を主張する多くの研究で検証されているが、その關係の規模や内容に対する都市度の影響を検証したのが、フィッシャーである。彼は北カリフォルニアで調査を行い、都市度を「コミュニティ内とその近郊に住む人口量」と捉えたうえで (Fischer 1982:23)、semi-rural、towns、metropolitan、regional core という4つの都市度の異なるコミュニティを比較し、都

市度の社会的ネットワークへの効果を分析した (Fischer 1982:81)。その中で親族関係については次の知見を得ている。年齢や収入などの影響を取り除いてもなお、都市度は親族関係に対して、有意な効果をもち、より都市度の高い場所に住む人はより都市度が低い場所に住む人より親戚の数が少ない。また、都市の人々は農村の人々より、親族関係のかわり合いにおいて、選択的になる (Fischer 1982:83)。すなわち、親子・きょうだいという「中核親族」との関係を中心とする選択的なものになり、他の親戚との関係は衰退するというものである。

この後者の、親族関係の選択性という知見は重要である。日本の都市の親族関係についても、すでに、「同族団規定がほぼ消滅しているような状態では、成員資格に関して共有され得る客観的基準は認め難く、個人の視野構造に基づき、結婚式や葬式あるいは会食やおしゃべりなどの事柄に応じて個人選択的な原理によって関係構成がなされる」と指摘されている (大橋・清水 1972)。親族関係は、血縁か姻縁によって結ばれているという事実と相互認知があって成立するのだが、都市においては、現実のつきあいはそれらだけでは実践されず、個人選択的な原理がさらに働くことによって、親密につきあう親族から関係が疎遠になる親族までを選別していくのである。都市の親族関係の特性は、制度的・儀礼的な集団的結びつきから、選択的・非拘束的なネットワークへと変化しているのである (安河内 1995:34)。このような都市住民の親族ネットワークは、たとえば、日頃から親しい親戚の人数などの量的側面、および、領域ごとのサポート機能のあり方、接触の仕方と頻度、居住地間の時間距離、そして最も親しい人とのつきあい (インティメイト・ネットワーク) などの質的側面から捉えていくことが可能である。

インティメイト・ネットワークは、個人がとり結ぶパーソナル・ネットワークの一部であり、複数、存在する相手のうちのたった1人との関係である。しかし、単なる1人ではない。個人の選択性・選好性が最も先鋭に表れる特別な関係である。したがって、関係の選択性を把握する指標の一つとして、インティメイト・ネットワークを明らかにすることは意味のあることだと考えられる。また、インティメイト・ネットワークの分析からは、「同類結合」を測定することが可能となる。「同類結合」の分析には、「人々の行動面から階層間の結合／断絶を把握しなす」(林 1997:32) という意義があり、この点からもインティメイト・ネットワークを明らかにすることの意味が強調されよう⁽²⁾。とはいえ、インティメイト・ネットワークが示す特性から、パーソナル・ネットワークについて明らかにできることは、限定的なものであることを留意しておかなくてはならない。

さて、本稿では、先行研究の知見を踏まえて、親族ネットワークの選択性について、それが最も先鋭に表出される関係という意味合いから、インティメイト・ネットワークをとりあげ、その規定要因を分析する。次に、インティメイト・ネットワークの特性を「学校時代の友人」や「職場・仕事関係」など、親戚以外の他の出会いの社会的文脈との比較によって分析していく。なお、後述するように、本稿で分析するインティメイト・ネットワークは、両親・子供・同居している家族以外で最も親しい1人との関係である。

以上のような問題意識と分析枠組に基づいて、冒頭に挙げた課題に取り組んでいく。

2. データと変数

分析に用いるデータは、1995～1997年に行った「都市度とパーソナルネットワークに関

インティメイト・ネットワークについて、質問票では、両親・子供・同居している家族以外で最も親しい1人を想起してもらい属性や回答者との関係性など14項目を尋ねている⁷⁾。最も親しい人との出会いの社会的文脈は、「親戚」、「学校時代の友人」、「現在の職場・仕事関係」、「子供を通じての友人」、「習いごとやサークルを通じての友人」、「近所」、「その他」から選択してもらい、さらに、「親戚」の場合には、「自分のきょうだい」、「配偶者のきょうだい」、「おじ・おば」、「いとこ」、「おい・めい」、「その他」の中から続柄を回答してもらった。相手との関係性の質問項目としては、知り合ってから年数、および、相手との居住地間時間距離を実数で、また、接触頻度、電話頻度、および、相手に対する配偶者の認知度をカテゴリーで回答してもらった。

			東京	福岡	新潟	富士	松江
		(N)	183	185	109	116	139
性 別	男性	347	46.4	47.6	51.4	51.7	41.7
	女性	385	53.6	52.4	48.6	48.3	58.3
年 齢	3 0 代	107	11.5	21.6	7.3	19.8	10.8
	4 0 代	199	26.2	25.9	26.6	29.3	28.8
	5 0 代	214	30.1	26.5	33.9	31	26.6
	6 0 代以上	212	32.2	25.9	32.1	19.8	33.8
学 歴	初等	138	12	13.7	27.1	24.3	27.4
	中等	357	47.4	50.3	56.1	45.9	55.6
	高等	208	40.6	36	16.8	29.7	17
収 入	500万円未満	201	23.5	27.3	34.3	22.1	34.3
	500-900万円	295	36.9	39.9	39.8	51.3	40.1
	900万円以上	224	39.7	32.8	25.9	26.5	25.5

収入は世帯収入

3. 最も親しい人としての親族

(1) インティメイト・ネットワークの規定要因

ここでは、どのような属性の人たちが最も親しい人との出会いの社会的文脈が親戚であるのかについて検討する。

表－2 インティメイト・ネットワーク(親戚)に関するロジスティック回帰分析
(従属変数＝最も親しい人が親戚(1)／違う(0))

N	691		
－2 L L (0)	693.8		
Model Chi	28.9	***	
	b	Wald	
性 別	-0.07	0.11	ns
年 齢	0.02	2.83	ns
教育年数	-0.11	6.22	*
世帯収入	0.00	0.30	ns
都 市 度		10.66	*
東 京	-0.84	8.33	**
福 岡	-0.61	4.87	*
新 潟	-0.73	5.42	*
富 士	-0.62	3.85	*
Constant	-0.55		

註) *** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$, ns $p > .05$

性別はダミー変数で、男性=1、女性=0とした。

都市度はダミー変数で、松江を基準カテゴリーとした。

表－2は、最も親しい人との出会いの社会的文脈が親戚であるかどうかを従属変数としたロジスティック回帰分析の結果である。独立変数としては、都市度に加えて、先行研究で示された示唆から、性別、年齢、教育年数、世帯収入を投入した⁽⁸⁾。従属変数については、最も親しい人が「親戚である」を1、「親戚ではない」を0として分析した。その結果、都市度と教育年数が有意な効果を示した。教育年数についてはそれが低い人ほど、最も親しい人を親戚から選択する確率が高くなる。また、表－2であげた独立変数の他に職業（従業形態）、居住歴、地域移動経験をコントロールしてもなお、教育年数の有意な効果に変わりはない。教育年数は、親族ネットワークの規模にも有意な効果をもっており、関連性の深さを示す結果となった⁽⁹⁾。しかし、都市度については、慎重な見方をしなければならない。というのは、都市度が最も低い松江を基準とすると、他の4都市、東京、福岡、新潟、富士は最も親しい人を親戚から選択する確率が低くなるという結果を得られるが、福岡、新潟、富士の回帰係数が、都市度の序列にしたがってないので、単純に都市度が低いほど、最も親しい人を親戚から選択する確率が高くなるとは言えないからである。さらに、都市度が最も高い東京を基準とすると、松江についてのみ有意な差が見られ、福岡、新潟、富士とは有意な差ではない⁽¹⁰⁾。したがって、最も親しい人を親戚から選択するかどうかについての都市度の効果は有意ではあるが、限定的なものととらえなければな

らない結果となった。

(2) インティメイト・ネットワークの諸特性

次に、最も親しい人としての親族とはどのようなつき合い方をしているのかについて、検討する。

表－3 最も親しい人との出会いの文脈別：関係数

	N	近 親	親しい 親戚	世帯外親 族関係	学校友 人	職場友 人	子供友 人	習い事 友人	近隣友 人
親 戚	133	1.98	1.33	2.07	1.44	0.71	0.89	1.05	0.79
学 校	172	1.72	1.22	1.83	3.86	0.52	0.78	1.12	0.93
職 場	136	1.87	1.22	1.93	1.37	1.09	0.44	1.01	0.77
子 供	52	1.78	1.14	1.83	1.73	0.41	2.94	1.37	1.20
習い事	61	1.92	1.20	1.99	1.79	0.40	0.48	5.13	1.16
近 隣	67	1.95	1.29	2.03	1.04	0.56	0.82	1.46	1.15
その他	14	1.66	0.77	1.52	1.33	0.29	0.67	0.53	0.51
	635	1.85	1.23	1.93	2.09	0.66	0.88	1.51	0.92
		***	ns	***	***	***	***	***	***

註) 関係数は実数に1を加えて対数変換した値

註) ***=p<.001 ; **=p<.01 ; *=p<.05

まず、最も親しい人が親戚である人は、親族ネットワーク・サイズも大きいのかどうかについて見ていくことにする⁽¹¹⁾。表－3は、親族関係、学生時代に知り合った友人（以下、学校友人と呼ぶ）、職場や仕事で知り合った友人（同、職場友人）、子どもを通じて知り合った友人（同、子供友人）、習い事やサークル・団体活動を通じて知り合った友人（同、習い事友人）、そして近所の友人（同、近隣友人）のそれぞれの平均人数について、インティメイト・ネットワークの出会いの社会的文脈によって、比較したものである。

表－4 最も親しい人の文脈別ネットワーク占める親族比率

	N	%
親 戚	130	44.1
学 校	169	31.1
職 場	133	35.0
子 供	51	32.8
習い事	58	34.4
近 隣	63	41.7
その他	14	32.9
	618	36.2

註) F検定0.01%有意

表－5 最も親しい人（親戚）の続柄

	N	%
自分のきょうだい	64	48.5
配偶者のきょうだい	22	16.7
おじ・おば	9	6.8
いとこ	23	17.4
おい・めい	7	5.3
その他	7	5.3
	132	100.0

最も親しい人が親戚である人は、近親関係保有量、親しい親戚の人数、世帯外親族関係

数がすべて最も多くなっている。したがって、最も親しい人が親戚である人は、親族ネットワーク・サイズ自体も大きいと言えよう。また、パーソナル・ネットワークに占める世帯外親族関係の比率も44.1%と最も高くなっている（表－4）。これらのことから、最も親しい人が親戚である人は、他の文脈に比べて、親族関係に傾斜したつきあいを保持する傾向にあると考えられる。他方、各友人関係数については、近隣関係を除いて、その最大数を示す文脈はインティメイト・ネットワークの文脈と一致していた⁽¹²⁾。

次に、最も親しい人としての親戚の具体的な続柄を見ると、自分のきょうだいが48.5%（64人）で最も多くなっている（表－5）。本分析では、親・子供・同居の家族は含まれないので、別居の自分のきょうだいが本人にとって最も近親になるが、選択的・選好的紐帯である最も親しい人としては、この近親者が最も多い結果になった。

最も親しい人との交際頻度を示しているのが、表－6である。最も親しい人が親戚である場合、対面接触の回数は「月1、2回」が最も多くなっている。これは、「近隣」を除いて、他の文脈と同じである。際立った特徴は、「親戚」に関してよりむしろ、「学校」の対面接触頻度の少ない人の割合が高いことと、「習い事」および「近隣」のそれが多い人の割合が高いことに見られる。これは回答者と最も親しい人の居住地間の時間距離にも影響を受けていると考えられる（平均時間距離は；「親戚」61.7分、「学校」77.7分、「職場」50.3分、「子供」26.7分、「習い事」31.8分、「近隣」11.2分、「その他」40.7分、全体平均52.1分）。紙幅の都合上、電話頻度のクロス集計表をここに提示することはできないが、対面接触頻度と同様の分析を行ったところ、電話で話す回数も「月1、2回」が最も多くなっている。しかし、対面接触がほとんどない人がわずか1.5%であるのに対して、電話で話すことがほとんどない人が13.6%いる点は、これら2つの交際手段の間の大きな相違になっている。

表－6 最も親しい人：出会いの文脈別対面接触頻度

	(N)	ほとんど毎日	週2、3回	週1回	月1、2回	2、3ヶ月に1回	年1、2回	ほとんどない
親 戚	131	7 5.3%	12 9.2%	18 13.7%	48 36.6%	22 16.8%	22 16.8%	2 1.5%
学 校	172	1 0.6%	5 2.9%	19 11.0%	51 29.7%	34 19.8%	50 29.1%	12 7.0%
職 場	136	17 12.5%	12 8.8%	15 11.0%	48 35.3%	20 14.7%	19 14.0%	5 3.7%
子 供	52	2 3.8%	5 9.6%	12 23.1%	17 32.7%	9 17.3%	6 11.5%	1 1.9%
習い事	60	2 3.3%	14 23.3%	16 26.7%	21 35.0%	5 8.3%	2 3.3%	0 0.0%
近 隣	67	13 19.4%	20 29.9%	15 22.4%	13 19.4%	3 4.5%	3 4.5%	0 0.0%
その他	15	1 6.7%	3 20.0%	3 20.0%	4 26.7%	2 13.3%	0 0.0%	2 13.3%
	633	43 6.8%	71 11.2%	98 15.5%	202 31.9%	95 15.0%	102 16.1%	22 3.5%

註）カイ二乗検定0.1%有意

表－7 最も親しい人：出会いの文脈別配偶者認知

	(N)	親しいつ きあい	会ったこ とはある	話には聞 いている	全く知ら ない
親 戚	131	119 90.8%	9 6.9%	2 1.5%	1 0.8%
学 校	171	90 52.6%	64 37.4%	13 7.6%	4 2.3%
職 場	136	57 41.9%	52 38.2%	19 14.0%	8 5.9%
子 供	51	18 35.3%	28 54.9%	4 7.8%	1 2.0%
習い事	59	26 44.1%	24 40.7%	7 11.9%	2 3.4%
近 隣	67	49 73.1%	18 26.9%	0 0.0%	0 0.0%
その他	15	9 60.0%	4 26.7%	2 13.3%	0 0.0%
	630	368 58.4%	199 31.6%	47 7.5%	16 2.5%

註) カイ二乗検定0.1%有意

最も親しい人との交際の仕方について、配偶者がどのようなスタンスをとっているかを示したのが表－7である。最も親しい人が親戚である場合の最も顕著な特徴は、「配偶者も親しくつきあっている」と回答した比率が約90%と圧倒的に高いことである。この結果からは、最も親しい人が親戚である人は相手と夫婦ぐるみで交際していることがわかる。

4. 結語

最後に、考察とまとめを行うことによって本稿の結語としたい。本稿では、親族ネットワークの特性を明らかにするために、インティメイト・ネットワークに着目して分析を行ってきた。どのような人が最も親しい人を親戚から選択するかに関して、ただ単に属性ごとの比率を見るだけでなく、他の変数をコントロールしたうえでの分析は、残念ながらこれまでほとんど行われてこなかった。その意味で、今回の分析は、親族ネットワークの特性について、一つの知見を提供できたのではないかとと思われる。

分析結果について見ると、まず、最も親しい人を親戚から選択する要因として、教育年数と都市度が有意な効果をもつことが明らかになった。教育年数は、他のどの変数の影響をコントロールしても、その効果が残ることから、独立変数としての強さが確認されたと言える。教育年数が高い、すなわち、高学歴者は、低学歴者に比べて、学校時代の友人が多い。学校が関係形成の場であり、高学歴者はその学校の在籍期間が長いからである。さらに、学校時代の友人とは、全人格的につきあった歴史があるうえに、その後も利害関係なしにつきあえるので、単なる友人以上の最も親しい人となる可能性が高くなることは容

易に想像できるだろう。そのような最も親しい人の「貯水池」(Fischer 1984=1996:194)をもたない低学歴者は、最も親しい人の「貯水池」として親戚に向かう確率が高くなるのではないかと考えられる。他方、都市度の効果が、限定的なものとはいえ、最も親しい人を親戚から選択する要因として見出されたことは、都市度が親族関係の選択性に一定の影響をもっていることを明らかにした。都市度が低いところでは、最も親しい人を友人の「貯水池」から引き出せないことが、親戚に求める結果につながったと予想される。しかし、都市度の高い東京、福岡、新潟、富士の間では、都市度の差異ほど友人の「貯水池」の差異は大きくない、つまり、都市度が高いからといって、現実につきあう友人の数が多くなることはないのであり⁽¹³⁾、都市度の差異は「友人選択に際していくらか選択の幅が大きく」(Fischer 1984=1996:194)なる程度の差異しか生まないため、結果的に、最も親しい人を親戚から選択する可能性もまた広がらなかったのではないだろうか。

次に、最も親しい人としての親戚とのつきあいの様相について見ると、接触頻度については、きわだって顕著な特徴は見出されなかったものの、配偶者のスタンスの取り方が、他の出会いの社会的文脈と大きな差異があり、その親戚とは、配偶者とも親しい親戚としてのつきあいがあり、夫婦ぐるみでの交際をしている割合が高いことが明らかになった。

都市住民の親族ネットワークについて分析、考察を行った結果、上記のような知見が得られたわけであるが、都市という独立変数とその都市に居住する人たちの親族ネットワークへ与える効果に関する検証は、たとえば、本稿で取り上げた以外の都市を対象にするなどして、さらに積み重ねていく必要があるだろう。また、インティメイト・ネットワークという切り口は、まだ研究の蓄積が少ない分、今後さらに改良、発展の可能性を秘めているように思われる。したがって、親族ネットワークだけでなく、友人関係や近隣関係、職場関係など、個人がとり結ぶ多様な社会関係への適用を試みることも今後の課題となろう。

註

- (1) たとえば、野辺のキャンペラでの調査(野辺 1991)、野沢の墨田区における職業的地位とパーソナル・ネットワークの研究がある(野沢 1992)。
- (2) 林は、個人の属性として職業的地位に着目して、対象者本人とインティメイト・ネットワークの相手の職業的地位とどの程度関連があるかを分析し、その同類結合について明らかにしている(林 1997)。
- (3) 本調査は、平成6年度～平成8年度科学研究費補助金(基盤研究(A)-(1)):研究代表者森岡清志「都市度とパーソナルネットワークに関する研究」による。
- (4) 1990年国勢調査による。
- (5) 松本は、「パーソナル・ネットワークの観点からは、アーバニズム(都市度)は、「ある場所における、日常的に接触可能な人口量」とするのが、論理的に最も首尾一貫しており、発展可能性が高い。」と主張している(松本 1995:87)。本稿で採用した都市度の定義もこれに依拠している。
- (6) 東京、福岡の人口と人口密度は、それぞれ、東京都、および、福岡市のものである。
- (7) 最も親しい人についての質問項目は;性別、年齢、居住地間時間距離、対面接触頻度、電話で話す回数、出会いの社会的文脈、つきあいの年数、配偶者の有無、出身地、最終学歴、現在就いている職業の形態・企業規模・職種、配偶者の認知度である。
- (8) 大谷は、性別、年齢(カテゴリー)、学歴(カテゴリー)、収入(カテゴリー)、「結婚状況」のそれぞれについて、「最も親しい人の種類」(親戚・近所・友人・職場)の比率を検討している(大谷 前掲書:125-127)。本分析では、先行研究の成果をさらに精緻化するために、他の変数の影響を除去し

でも残る独立変数の効果を測定できる方法をとった。投入した変数のうち、教育年数は、質問票では最終学歴をカテゴリーで質問しているのを次のように変換したものである；旧制小学校＝7年、旧制中学校＝11年、旧制高校＝14年、旧制大学＝17年、新制中学校＝9年、新制高校＝12年、新制短大・高専＝14年、新制大学＝16年、医学部・大学院＝18年。また、世帯収入もカテゴリーで質問されているので、各カテゴリーの中央値から、「300万円未満」＝300万円、「300万～500万円未満」＝400万円、「500万～700万円未満」＝600万円、「700万～900万円未満」＝800万円、「900万～1100万円未満」＝1000万円、「1100万～1300万円未満」＝1200万円、「1300万～1500万円未満」＝1400万円、「1500万円以上」＝1500万円という量的変数に変換した。

- (9) 親族ネットワークの規模に関して、近親関係保有量、親しい親戚の人数、世帯外親族関係数を従属変数として分散分析を行ったところ、次のような結果になった。近親関係保有量に対しては、都市度、年齢、教育年数が有意な効果をもっていたが、性別、居住歴（5年未満・5～20年・20年以上というカテゴリー）、地域移動経験（非移動・近距離移動・遠距離移動というカテゴリー）、世帯収入（500万円未満、500万～900万円未満、900万円以上というカテゴリー）は有意な効果をもたなかった。親しい親戚の人数に対しては、性別と教育年数が有意な効果をもち、都市度、居住歴、地域移動経験、世帯収入、年齢は有意な効果をもたなかった。そして、世帯外親族関係数に対しては、都市度、居住歴、年齢、教育年数が有意な効果をもっていたが、性別、地域移動経験、世帯収入は有意な効果をもたなかった。なお、親しい親戚の人数（両親・子供・きょうだい以外）、それらをあわせた世帯外親族関係数を分析の対象とする。親しい親戚（の人数は、質問票では、「いない」、「1～3人」、「4～6人」、「7～9人」、「10人以上」のカテゴリー質問であるのを、それぞれの中央値をとって、0、2、5、8、10という量的変数に変換した。親族ネットワークの各変数はその分布に偏りが見られるので、分析の際には実数に1を加えて対数変換した数値を用いた。
- (10) 東京を基準カテゴリーとした場合、回帰係数は、福岡0.23、新潟0.11、富士0.22、松江0.84である。
- (11) 非親族ネットワークに関しては、質問票では、まず最初に友人の総数を質問し、その後、距離別、および、出会いの社会的文脈別にその内訳の人数を質問した。非親族ネットワークの各変数はその分布に偏りが見られるので、分析の際には実数に1を加えて対数変換した数値を用いた。
- (12) この結果は、先行研究における、インティメイト・ネットワークと関係カテゴリーごとのネットワーク・サイズとの関連についての指摘を再確認したことになる（大谷 1995:105-106）。ただし、大谷の四国調査と中四国調査においては、出会いの社会的文脈として「子供を通じて」と「習い事やサークル・団体活動を通じて」を区別してないので、近隣関係についても、関係カテゴリーごとのネットワーク・サイズは最大値を示している。
- (13) 友人総数の都市別の平均の比較を行ったところ、有意な差はなかった。

文献

- Fischer, C.S. 1982 *To Dwell among Friends: Personal Network in Town and City*. Univ. of Chicago Press
- Fischer, C.S. 1984 *The Urban Experience*, 2nd ed. 松本康・前田尚子（訳）『都市的体験—都市生活の社会心理学』 未来社 1996
- 林 拓也 1997 「職業的地位とネットワーク特性」『総合都市研究』64、東京都立大学都市研究所、pp.25-38
- 松本康 1995 「現代都市の変容とコミュニティ、ネットワーク」『増殖するネットワーク』、勁草書房、pp.1-90
- 野辺政雄 1991 「コミュニティ・クエスチョン-キャンペラにおける検証-」『社会学評論』42（2）pp.2-17
- 野沢慎司 1992 「インナーエリアとコミュニティの変容」『大都市社会のリストラクチャリング』日本評論社 pp.125-152
- 大谷信介 1995 『現代都市住民のパーソナルネットワーク』 ミネルヴァ書房
- 大橋薫・清水新二 1972 「都市における親族関係の一考察-川崎市S小学校区の場合」『明治学院論叢』195 pp.1-34 （『リーディングス日本の社会学4 『現代家族』所収）1987 東京大学出版会

- Simmel,G 1903 *Die Grossstädte und das Geistesleben*=1965 松本通晴（訳）「大都市と心的生活」、鈴木
 広（編）『都市化の社会学』 誠信書房
- Wellman,B 1979 *The Community Question: The Intimate Networks of East Yorkers* AJS 84（5） pp.1201-
 1231
- 安河内恵子 1995 「都市社会における集団参加とネットワーク形成」『都市問題』86（9） pp.27-40
 東京市政調査会

（東京都立大学大学院社会科学研究科博士課程）